

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：82674

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24531051

研究課題名(和文) シニアの学校支援ボランティアの活用に向けたコーディネート力向上プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Program to Improve Coordinators' Ability to Utilize Senior School Volunteers

研究代表者

倉岡 正高 (Kuraoka, Masataka)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号：50596848

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：学校支援コーディネート活動やシニアのボランティア活動の課題解決を目的とし、シニアボランティアを活かすコーディネートに関する研修プログラムを開発した。プログラムは、コーディネーターの現状と課題、高齢者の理解(身体的特徴、認知的特徴)、シニアボランティアを活かした具体的な方法から構成し、3自治体にて研修を実施した。研修後、小学校の図工の授業を、地域のシニアボランティアが支援するプログラムを実施した。児童の高齢者に対する意識のクイズでは合計スコアが下がったことが、高齢者をより肯定的に見るようになった傾向が見られた。学校支援コーディネーターとシニアボランティアのためのマニュアルを制作した。

研究成果の概要(英文)：This study focused on developing a training program for school support coordinators to utilize senior volunteers for better school support. The program was developed to learn the issues of school support coordinators, understand the physical and cognitive traits of elderly volunteers, and explore how to utilize senior volunteers in school settings, and was implemented in three municipalities. After the training program, a school support activity was introduced in an elementary school with senior volunteers involved. The total score of attitude toward elderly by the students declined after the intervention but positive score was improved. Based on this study, a manual for school support coordinators and senior volunteers was developed.

研究分野：世代間交流

キーワード：世代間交流 学校支援 シニアボランティア

1. 研究開始当初の背景

(1)社会的背景

2050年には40%の人口が、65歳以上になることが推計されている中、高齢者の社会活動への関わりは、生涯学習という点だけではなく、いかにして高齢者が社会へ継続的な関わりを持ち、元気に生きていくかということに直結する。我が国の高齢者に係る支出増加に対し、保険料負担やさらなる年金支給年齢の引き上げなど避けられない状況にある中、地域の高齢者の能力をいかし、健康維持につながるような地域活動への関わりは、社会給付の抑制にもつながると考えられる。

(2)世代間の視点

「世代間格差」と言われる問題にもあるように、高齢者施策を支えるための若年層の負担が問題視されている。核家族化、プライバシー保護・匿名化のもとコミュニティの崩壊が進むわが国においては、一度疎遠となった世代と世代をつなぐには、イベント型世代間交流ではなく、交流の効果を持続させる仕組みと仕掛けが一体となる必要がある(倉岡,2015)。

(3)教育現場における学校と地域の連携

学校現場では、2004年には学校運営協議会制度が導入され、また学校支援地域本部事業が2008年よりスタートしたことにより、地域コーディネーターを中心にした、学校支援活動が全国的に活発になっている。一方、こうした取り組みは地域や学校により格差があり、学校のニーズとボランティアのミスマッチや、コーディネーターと学校の連携が不十分であったり、研修の不足などの実態が報告されている(文部科学省,2011)。

また、読み聞かせを実践しているシニアボランティア、受け入れ施設職員のインタビュー調査からも、高齢者ボランティアの活用について様々な課題(特に受け入れ施設の高齢者に関する知識不足やボランティアとの間のコミュニケーション不足に起因する課題)などが認められる(倉岡・鈴木,2012)。

学校と地域の連携に対する学校職員と地域住民の理解や協力は、学校と地域による格差が大きく、地域コーディネーターが学校と地域の連携の中心的役割として活動するには、継続的な研修や、学校が導入しやすいプログラムの開発や、ボランティア供給のシステムづくりなどが重要な課題となっている。

2. 研究の目的

近年、学校と地域の連携に関する施策が進む中、学校現場で活躍するシニアボランティアが増加している。しかし、高齢者の身体的・精神的特性などは教育現場においてはこれまで十分に理解されていない。本研究は、こうした学校現場でのシニアボランティアの実態を調査し、地域コーディネーターやシ

ニア(概ね60歳以上のボランティア)が抱える課題を検証する。さらに、実態調査をもとに開発するプログラムをとおして、学校支援のコーディネート活動やボランティア活動の課題解決につながったか、またその後の活動や児童に与える効果を評価することにより、学校を中心にしたシニアの社会参加の機会の創出と、地域福祉的意義を持った学校と地域の連携の仕組みづくりを目的とする。

3. 研究の方法

(1)コーディネーターの課題調査

東京都内、千葉県、横浜市にて活動する学校・地域コーディネーターを対象(22人)に、シニアボランティアを活かしたコーディネート活動の課題について聞き取り調査を実施した。

(2)シニアボランティアを活かすコーディネーター研修の開発

前述の調査及び専門家を交えて検討し開発したシニアボランティアを活かすコーディネーター研修の試行版を、横浜市にて実施した。その結果、一部修正した研修を完成版として開発した。

(3)シニアボランティアによる支援プログラム

横浜市の小学校にて、シニアボランティアを活かしたプログラム(図工の授業支援)を導入した。事前にプログラムに関わるシニアボランティアに対し、(1)の研修内容をふまえたコーディネーターによるオリエンテーションを実施し、シニアボランティアが授業支援を行うために必要な理解を促した。

(4)高齢者に対する意識

2014年度、横浜市立A小学校の6年生の全学級(n=103)の図工の授業に地域のシニアボランティアが支援を週に1回2か月間行った。授業開始前と授業終了直後に高齢者に対する意識のクイズであるChild-Adolescent Facts on Aging Quiz(CAFAQ)(Haught et.al,1999)を実施した。CAFAQは、子どもと青少年の高齢者に対する意識について16の質問から構成されており、全体の正答数及び、質問によって不正解の場合には、ポジティブバイアス(過剰に高齢者を肯定的にとらえている)か、ネガティブバイアス(過剰に高齢者を否定的にとらえている)に判別され、合計正答数と同様にそれぞれスコア化される。

4. 研究成果

(1)コーディネーターの課題

コーディネーターの聞き取り調査から、肯定的な点として、コーディネーターが高齢者と若いボランティアを特に区別していないこと、高齢者のコミュニケーションスキルの高さ、ネットワークを通じた情報伝達の速さ、厳格さを評価している。高齢者が必

要とする条件などを満たすような配慮をしていないこと、また高齢者に対する理解や工夫を学ぶ研修も実施されていないことが示された。

(2) 研修プログラムの開発

シニアボランティアを活かすコーディネーター研修の試行版を横浜市青葉区にて実施した(講義1から3)。内容を検証し、身体機能に関する知識と理解については、実際の活動に参加するシニアボランティアからイメージが難しいという意見から、完成版(表1)ではプログラムから除外した。東京都町田市及び福島県相馬市にて実施した。

表1 シニアボランティアを活かすコーディネーター研修

講義1	地域とともにある学校づくり～コーディネーターの重要性
講義2	記憶とコミュニケーション、認知機能の理解
講義3	シニアボランティアの力を活かすために

(3) 児童の変化

CAFAQの合計スコアの平均値は、事前の合計スコアの平均値は9.42(SD=2.089)、事後では、9.01(SD=2.427)であり、合計スコアは、介入後に有意に低下した(p<0.05)。ポジティブバイアススコアについても、有意な差がみられた(p<0.001)が、介入後にスコアは上昇した。ネガティブバイアススコアについては有意差は認められなかった。

研究の結果から、シニアボランティアが支援する世代間交流を取り入れた授業においては、介入後の高齢者に対するCAFAQの合計スコアが下がったことから、世代間交流が必ずしも正しい認識につながらなかったことが示唆された。ただし、ポジティブスコアが有意に上がったことから、高齢者をより肯定的に見るようになった傾向が見られた。

(4) 考察

シニアボランティアは毎年増加しているが、学校支援のコーディネーターを対象にした様々な自治体の研修において、シニアの視点に立った研修内容は依然として少ない。コーディネーターを対象にしたインタビューから、コーディネーターはPTA活動に関わっていた経験を持つ者が多く、その場合、地域のシニアボランティアを発掘するよりは、保護者や元保護者をボランティアして学校支援に活用していることが伺えた。こうした現状の中、限られた研修時間にシニアボランティアを活かす視点をどう組み込むのが課題である。

シニアボランティアが関わることによる効果は、児童の高齢者に対する意識という面では本研究ではあまり効果が見られなかつ

た。具体的な支援の担い手が求められる活動の場合、シニアボランティアの関わりは、授業の内容によっては教員の負担軽減になったり、指導が円滑に進むことが示唆された。シニアボランティアの関わり効果は、教育的側面について、学級運営等も含めた多角的な効果の検証が必要であると考えられる。

<引用文献>

文部科学省生涯学習政策局社会教育課(2011),平成22年度学校支援地域本部事業の実施状況調査報告書,
http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1314507.htm, (2016年6月15日)

倉岡, 世代間交流活動-シニア世代の生き方づくり、ふくしと教育、18号(2015)、p30-31

倉岡・鈴木、『社会教育が地域を元気にする～平成23年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」のための実証的共同研究採択事業報告～』,2012年6月1日, pp14-15, 月刊生涯学習

Haught, P., Walls, R., Laney, J., Leavell, A., & Stuzen, S. (1999). Child and adolescent knowledge and attitudes about older adults across time and states. *Educational Gerontology*, 25, 501-517.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

倉岡正高, 世代間交流活動 - シニア世代の生き方づくり、査読無し、ふくしと教育、18号(2015年), p30-31

〔学会発表〕(計4件)

Kuraoka M, Intergenerational Perception Change in Ten Years at a Japanese Elementary School. The 68th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), 2015年11月18-22日, オーストラリア(米国)

倉岡正高, 世代間交流が児童の高齢者意識に与える影響の変化: 2004年と2014年の比較調査から、第6回日本世代間交流学会, 2015年10月3日、追手門追手門学院大阪城スクエア(大阪府・大阪市)

Kuraoka, M. Intergenerational Programs in a Japanese Community: School and Other Educational Settings, Generations United, 2015年7月21-24日, ハワイ(米国)

Kuraoka, M. Toward a More Effective Use of Senior Volunteers: An Exploratory Study, Poster Presentation, 2012年11月14日, Gerontological Society of America, サンディエゴ(米国)

〔図書〕(計2件)

藤原義典、倉岡正高(編著) 大修館書店、コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック:シニアの力を引き出し活かす知識と技術、2016年、207p

倉岡正高編著、公益財団法人社会教育協会、地域を元気にする世代間交流、2013年、109p

〔その他〕

冊子 シニアボランティアのための学校支援スタートマニュアル・学校支援コーディネーターのためのシニアボランティアを活かすコーディネーターマニュアル(URL:<http://www2.tmig.or.jp/spch/>)

6. 研究組織

(1)研究代表者

倉岡 正高(KURAOKA, Masataka)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号: 50596848

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

藤原 義典(FUJIWARA, Yoshinori)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長

研究者番号: 50332367